2020年復活祭礼拝説教
「イースター・タイド」ルカ福音書 24:1～12

【聖書】
ルカによる福音書 24:1 そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を
持って墓に行った。2 見ると、石が墓のわきに転がしてあり、3 中に入っても、主イエス
の遺体が見当たらなかった。4 そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の
人がそばに現れた。5 婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、
生きておられる方を死者の中に捜すのか。6 あの方は、ここにはおられない。復活な
さったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。7 人
の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっ
ている、と言われたではないか。」8 そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。9
そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。10 それは、マグ
ダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。
婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、11 使徒たちは、この話がたわ言のよ
うに思われたので、婦人たちを信じなかった。12 しかし、ペトロは立ち上がって墓へ
走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きなが
ら家に帰った。

1　イースター・タイド

　イースターおめでとうございます。今日は、十字架に架かって亡くなられた主イエス・キリストが復活された日曜日を祝う復活祭、イースター。今日から四十日間,今年で言えば五月二十日までの期間を教会では復活節と呼び、お祝いします。主イエス・キリストは復活した後、四十日間を弟子達と共に過ごされ、天の父なる神の御許に帰られた、と聖書が記しているからです。この復活節を英語では＜イースター・タイド＞と呼ぶことがあるそうです。＜タイド＞とは、海が満ち干きする潮のこと。潮の満ち干きは時間と深い関わりがあることから＜タイド＞という英単語には「時」という意味もあるので、復活節を＜イースター・タイド＞と呼ぶのです。

　しかし、＜イースター・タイド＞の直訳である＜主イエスの甦りの潮＞という表現には、深い味わいがあります。潮には、一方向に働くうねりのような強い力があります。同じように、主イエスの甦りのニュースには、神の聖なる喜びへと人間を巻き込み連れ去る力を持っている、そのダイナミックな力が感じられる言葉ではないでしょうか。私達が暮らす世界にはない潮、力です。

2　死が支配する世界

　ある方はこう言いました。「この世界を支配している最も強い教義、ドグマは、何か。それは死である。“死ねばすべてが終わる”ということを圧倒的に多くの人が信じこんでいる。」死の教義、死のドグマがこの世界を支配している…というのです。本当にその通りだと思います。一人の例外なくみな死に、肉体は塵へと返る。全てが消えてなくな

り、滅び去る。私たちの根幹に深くしっかりと食い込んでいるのは、「死によって私たちは滅び去る」という信念ではないかと思います。

死の持つ力に痛切にその事に気づかされるのが、大切な人、身近な人が死んだ時ではないかと思います。私にとっては母の死でした。母の体が存在しなくなるという現実に直面して初めて死の力を思い知りました。母の声も聴けないし、顔を見ることもできないし、触れあう事もできない、自分の中の大切を失ってしまい、決して取り戻すことはできない…自分は、死の前にはつくづく無力な存在だと思い知りました。

死は大切なもの、かけがえのない者を奪い去る、だからこそ、私たちは、「自分と自分の大切な人達だけは、なるべく生き延びたい。その為なら他の人達が犠牲になるのは致し方ない」と自己中心的に、死に支配された命を生きます。死の潮流に巻き込まれ、滅びの淵へと向かっています。巨大な死への潮流が人間世界を支配しています。この潮流を抜け出ることができる人はいません。いや、いませんでした。十字架の主イエス・キリストが復活される前までは。

3　恐れる弟子達

主イエスを失った弟子達の群れ、最初の教会も死への潮流の中で沈みそうになっていました。主イエスの死に打ちひしがれていたのです。この方こそ救い主！と信じて、すべてを捨てて従って来た主イエスが、ローマ帝国の反逆者であり、神の子を名乗って神を冒涜する者として、十字架に架けられ、無残に殺されました。「一体何が起こっているのか」と混乱する者、茫然自失の者。自分達も十字架に架けられるかもしれないと恐れ戦ていた弟子もいたでしょうし、「これからどうなるのか」と不安にさいなまれていた者も多かったでしょう。弟子達はみな「死」に額づいていたのです。彼らは、主イエスが最後の過越しの食事をした家に集まり、戸を閉めて閉じこもっていたと伝えられています。死の潮の中で沈みかける舟、それが主イエスによって集められた者達、最初の教会の姿でした。

4　女たち

さて、日曜日、週の初めの日、夜の気配がまだ残る早朝、弟子達が集まっていた家の戸が開き出て来る十人足らずの女たちの影がありました。彼女達が朝の空気の中、急ぎ足で向かった先はイエス様の墓でした。この日より三日前の金曜日、イエスさまが十字架上で苦しみ抜き、「**父よ、わたしの霊を御手に委ねます**」と大声で叫んで亡くなったのは午後三時、日没までに数時間でした。金曜日の日没から安息日である土曜日が始まり、人々は働くことができません。主イエスは、とりあえず…という様子で、槍で刺されて流れ出した血や体液にまみれた体を十分に清め香油を塗る暇（いとま）もなく、慌ただしく墓に葬られました。その性急なやり方を遠くで見ていた女たちは、愛する先生の亡骸を清潔にきちんとして葬って差し上げたい…と考えたのでしょう。そんな女達の名前は、10節に記されています。みな、それぞれに生きることに傷つき呻き疲れ果てていた時、主イエスと出会い父なる神の愛を示され、救われた女たちです。

人類の歴史を振り返れば、女性は常に弱者でした。社会が女性の人権を男性と同じように尊重し始めたのは、つい最近。古代世界では女性は、男性よりは一段も二段も劣った存在で、社会では一人前扱いはされませんでした。しかし、本当に不思議なことですが、できたばかりの弱弱しく死の潮の中に沈みそうな教会の中で、そうとは気づかずに最初の一歩を踏み出したのは、常に主イエスの傍らにいて教え導かれた男の弟子達ではなく、主イエスや男の弟子達の世話をして仕えていた女たちでした。

このことにも、イエス・キリストの父である御神がどのようなお方であるかがよく現れていると思います。全知全能の神は、社会で優遇されている人よりは、人間社会で弱く小さくされ虐げられた者の味方であり、弱く小さくされた者に先ずご自身を示すお方。この時もそうでした。神から出た大波、大潮が、自分は偉いとふんぞり返っている者たちが作った世界に押し寄せてひっくり返すようなことが起ころうとしています。

5　二人のみ使い

当時の墓は、岩に横穴を掘っただけのもの、入り口は直径三メートルほどの大石でふさいでいました。女の力では動かせそうにはありません。しかし、実に意外なことに、その墓をふさぐ大石は取り除けられていました。朝の爽やかな空気の中に暗い口を開ける墓の中に女たちは入ります。しかし、そこに主イエスの亡骸はありません。一体どういう事か？？先生の亡骸はどこにあるの？？途方に暮れる女たち。

ふと気づくと、自分達の傍らに、光輝く、まばゆく白く煌めく衣をまとった二人の人が現れます、女たちはあまりの驚きに言葉もなく、その神的な輝きに人間にはないものを感じ恐れ戦いてひれ伏すばかり。そんな女たちにみ使いは言います。**「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。[6] あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」**

天使から、このように「主イエスが甦られた」と聞いても、女たちはなんのことやらわからなかったに違いありません。「死人が生き返るなんて、甦るなんてあり得ない。」死の潮流は強く、死の支配はなかなか解けません。そんな女たちに、み使いは続けます。**「まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。[7] 人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」**

6　思い出す、思い起こす、思い当たる

そして、**「婦人たちはイエスの言葉を思い出した」**と聖書は続きます。この6節と8節で使われている「**思い出す**」という言葉は、私たち教会の信仰にとって非常に重要な言葉です。

ここの「思い出す」というのは、ただ漠然と記憶を思い浮かべるのではありません。言葉の中の主、思い出の中の主が立って動くようになるまで、言葉の中、思い出の中の主イエスを探すのです。祈りつつ探すこと。「思い起こす」と言ってよいでしょう。記憶の中の主を立ち上がらせるのです。天使に促された女たちは、実際に主イエスの言葉を

そのように思い起こしたのです。故郷のガリラヤで弟子達の後ろで聞いた主イエスの声が、彼女達の頭の中に響いてきました。「**人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている。**」そう語る主の声音、その時の顔の様子、どういう姿勢で語っておられたかまで目に浮かぶように鮮やかに思い出した。そして、聞いた時にはさっぱり分からなかった主イエスの言葉の意味が初めて分かったのです、思い当たった、「ああ、そうか、あの時、先生が言われていたのは、今朝の空の墓のことだったんだ！」彼女達は思い当たったのです。ここでは「思い当たる」というのがぴったりでしょう。彼女達は、主の言葉に思い当たり納得した、「すとん」と腑に落ちました。その時、大きな確信が彼女達を捕えたのだと思います。「そうだ、死んで葬られた主イエスは確かに甦られた、生きておられる！」

7　甦りの命

主イエスは、一度は確かに死んで葬られました。しかし、今は生きておられる、神の力によって甦られたのです。再び死ぬ命への蘇生ではありませ、死に勝利した命が再び死ぬことなどはありません。永遠の命への甦りでした。
主イエスは、すべての人間がひれ伏していた死に打ち勝ち、永遠の命を受ける最初の人、新しい人となられたのです。この出来事が世界に流れる潮流の方向を変えました。甦りの命への大潮が力強く流れ始めたのです。この潮が最初に押し寄せてきたのは、女たち。主イエスの生前で言葉を思い起こした女たちに、十字架に架けられて死んだイエス様は永遠の命へと甦られ、死は完膚なきまでに打ち砕かれていた！という喜びの大潮が押し寄せてきました。イースター・タイド、復活の大潮です。

8　説教と聖餐式－教会の業

こうして甦りの主を受け容れ死の潮流を止め死の呪縛を打ち砕くことは、イエス・キリストの言葉を思い起こすことから始まりました。そう、教会の業の最初の最初、それは「**主イエスを思い起こすこと**」。教会はそうして甦りの潮流に乗ることができたのです。だから、主イエスを思い起こす業は今も連綿と続いています。説教もそうです。礼拝の説教には、毎週新しい知識を皆さんに与える講義のような一面もあります、でも、それは本質ではありません。毎日曜日に礼拝説教を聞いていると、すぐにわかることですが、説教者は毎回毎回、同じことを語っています。日曜日、主の復活の日ごとに、イエス・キリストの十字架と復活、神の義と愛を繰り返し繰り返し語り、そこに集った方々に主イエスを思い起こして頂くのです。牧師である私が、今ここで語る言葉もまた、根本的に新しいものではありません。教会が2000年繰り返し語ってきた言葉です。

聖餐式もそうです。今年のイースターは聖餐式を中止にせざるを得ませんでしたが、中止になって初めて聖餐に与ることが私達の信仰の重要な一部であったかをそれぞれが身に染みてお感じだと思います。その聖餐式の式文で読まれるのがコリントⅠ11：23から25。「**わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、**

『これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、『この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。」

弟子達が伝えた、十字架に渡される前の晩のイエス様の言葉、聖餐式を定めた言葉です。このうちの「**わたしの記念として**」と翻訳されている言葉を直訳すれば、「**わたしを思い出すために**」となります。聖餐式は、主イエスの十字架と復活を思い起こすためのものだと分かります。パンとブドウ果汁をそれぞれが味わうという行いを通して主イエスの十字架と復活を想い起すのです。これもまた教会が2000年間繰り返したこと。

しかし、私たちは礼拝で主イエスを想い起すとき、それは常に新しい出来事となります。説教で繰り返し語られた言葉を、現代世界を今生きている自分に主イエスが語られた言葉として新しく聞きなおすからです。主イエスが今の自分に何を語りかけておられるか、祈りつつ耳を澄ませる時に、言葉の中から起き上がった主イエス・キリストが新しい言葉を語りかけてくださいます。

また繰り返し行われてきた聖餐の食卓からパンとぶどう果汁を、全く新しいものとして味わいます。配られるパンとぶどう果汁を主が十字架の前の晩に祝福されたものとして、祈りつつ味わう時に、その行為の中に主イエス・キリストが起き上がって来るからです。そして主から「神との和解は成し遂げられた、あなたは救われ、神の子として生きる道が開かれた」というメッセージを新しく聞きます。繰り返される礼拝の中、新しく主イエス・キリストが起き上がり、私たちに語りかけてくださる、そこに甦りの命の潮が新たに起こります。

9　神が覚えていてくださる

しかし、私たちがこのように主イエスを思い起こし、神の子としての命を新たにされるのは、先ず神が私達を忘れる事なく覚えていてくださるからです。主イエスの母となった貧しく年若いマリアが神の栄光を賛美して歌った美しい歌の中に次のような一節があります。「**その僕イスラエルを受け容れて、憐みをお忘れになりません**」。天の父なる神・天地万物の創造主が、死に支配されて生きている私達をお忘れになることなく、私たちの滅びをご自分の悲しみ、痛み苦しみとしてくださっている、だから、私たちは、主イエスのことを思い起こすことができます。神が私達を忘れることなく、甦りの命の潮をたゆまず送り出してくださるからこそ、私たちは死への潮流から脱出して、甦りの命の潮の中に入ることができます。

海の潮の流れは、一見ゆるやかなようでも、実は激しいもの、一切を押し流し、連れ去ってしまう勢いがあります。主イエス・キリストの甦りの命も、それにまさる激しい勢いがあります。主の甦りの命の力を持つこの潮が、私たちを縛り付ける死の潮流から脱出させ、神の子の自由な命への潮流へ移し解き放つのです。それが日曜日ごとに、主の日ごとに主を思い出して新たに繰り返される礼拝の中で起きることです。

10　甦りの命の力の中で生きる

永遠の命に甦られた主イエス・キリストの力により、死の潮流から甦りの潮流へと移された人の生き方は自由でのびのびしています。新型コロナウィルスが猛威を振るい、人々は死を恐れて混乱し右往左往する中にあっても、じつに自由にのびのびと泳ぎ回っています。感染爆発が起こったイタリアでは医療現場の物資が圧倒的に足りなくなる医療崩壊が起こったと言われています。そのイタリアで、新型コロナウィルスに罹患した72歳のジュゼッペ・ベラルデッリ神父は、人工呼吸器は自分ではなく彼の教区の若い信徒に使って下さい…と言ってこの世の命を終えられたそうです。私は、彼の行為を模範的な行為として皆さんに推奨しているわけではありません。そのように神父にさせたのは、甦りの主イエスであったから。ジュゼッペ神父は、主イエスの十字架と復活を繰り返し思い起こしつつ、主イエスの命の潮の中で此の世を生きてきたのでしょう。この神父の生き方は、甦りの命への潮流にのって生きる生き方、自由な生き方。肉体の死の時も甦りの命の潮にのって生き抜きました。なんと自由な生き方かと思います。

11　伝える者となる

主イエスの復活の大潮に乗るように、女たちは、弟子達の待つ家へと戻ります。そして自分達が見聞きしたことを伝えたのです。しかし、弟子達は彼女達の話を「たわごと」と全くとりあいません。「たわごと」というのは、内容が空っぽの話、空虚な話。「死人が復活する筈なんてない、これだから女はあてにならない」というような態度だったのかもしれません。最初の弟子達でさえ、主の復活を信じず、伝える女たちを馬鹿にするような態度さえとったという事は、私たちを非常に力づけます。主イエス・キリストの十字架と復活を宣べ伝える教会も幾度となく「そんなバカな、へんな宗教にはまってる、洗脳されている」とか「頭がおかしいのではないのか」という誤解や侮蔑、よくても冷笑に出会うからです。しかし、それにひるむことなく相手を愛し祈り続けて折を見て語り続ければ、必ず主イエス・キリストが伝わる時が来る、相手にイースター・タイドが押し寄せる時が来る、それは私たちにはいつかは分からないけれども必ず来る、死の呪いに縛られた古い命を押し流し、神の子としての新しい命を与えるイースター・タイド、復活の大潮の時が来ることを信じることができます。

この時もそうでした。多くの弟子達が無視するなか、ペトロは立ち上がり、墓へと走ります。ここの「立ち上がる」と訳されている言葉には、「復活する」という意味があります。死の呪いを打ち砕く、主の甦りの命の大潮、＜イースタータイド＞が、主の甦りの知らせと共に、ペトロにも、弟子達にも迫ってきています。できたばかりの弱弱しい教会が甦りの潮流に乗る時が迫ってきています。女たちはそのようにして十字架と復活の主を伝える者となっていきました。神はこのように伝える者を求めておられます。何故なら、主イエスのことを聞いたことがなければ、主イエスを思い起こすこともできないからです。

12　試練が終わった時

私たちは今、猛威を奮う新型コロナウィルスの中、聖餐式も中止、墓前礼拝も延期という例年にない形でイースターを迎えています。また、今日はインターネットを経由して礼拝をささげておられる方も10名以上おられます。しかし、形は変わろうとも、礼拝の本質は変わりません。私たち一人一人の心の内に、今も生き生きと働いておられる十字架と復活の主イエスを思い起こし、心を合わせて、主イエスの父なる御神に感謝と賛美を献げる礼拝です。どうか、今日の礼拝を通して、私達が新たに主イエス・キリストの復活の大潮に巻き込まれ、死への呪縛から解き放たれ、新たな命、神の子の命を生きることができますように、主の甦りの命の潮の内に私達を一つにしてください…と額づいて祈ります。そして、主よ、別々に礼拝するという試練の時を終えた時、一人も欠ける事なく、この会堂に父なる神に呼び集められ、共に顔と顔を見合わせて甦りの命を喜び、父なる神を礼拝し、主の復活を高らかに宣べ伝えていきたいと心から心から願います。